

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 21 日現在

機関番号：37701

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26381243

研究課題名(和文) フランス中等教育における文学教育：文学遺産の形成・継承・課題

研究課題名(英文) The teaching of literature in secondary education in France: training, transmission and issues of literary heritage

研究代表者

飯田 伸二 (IIDA, Shinji)

鹿児島国際大学・国際文化学部・教授

研究者番号：60289650

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：フランスの学校教育における文学遺産について重要な発見をした。中等教育の民主化に大きく貢献した1938年改革から「統一コレッジ」と呼ばれる改革が施行される1977年までに使用された前期中等教育国語の教科書では、「17世紀から今日に至る散文及び韻文の抜粋」という項目が、他の学習項目に比べて特段多くの紙数を占めているのである。この事実は、文学的教養の涵養に特化した中等教育という定説に再考を迫る。

一方、2009年以降のカリキュラムに準拠した教科書は、上記の期間に比して文学教育を重視した構である。これは社会の安定のために、共通の教養を市民に普及させるべき、という社会的要求が働いているためと考えられる。

研究成果の概要(英文)：We have succeeded in discovering some important facts about the literary heritage in secondary education in France. During the period from the reform of 1938, which marked an important step in the democratization of secondary education, to 1977, when the "College unique" was set up, the section entitled "Selected pieces in prose and in verse from the 17th to the present day" occupies a great number of pages in the textbooks. This fact calls for a reconsideration of the established view that the teaching of French in secondary schools favors the formation of literary culture.

On the other hand, textbooks conforming to the 2009 curriculum place much more emphasis on literary education than the said period. This fact reflects the growing social demand that schools should contribute to building social peace by forming a common culture among future citizens.

研究分野：フランスにおける文学教育

キーワード：文学教育 中等教育 文学遺産 フランス 教科書 教科教育 抜粋選 中等教育の民主化

1. 研究開始当初の背景

(1) 文学教育の絶対的優位

文学的規範を次世代へ継承することは、フランスにおける国語教育の主要な使命の1つである。20世紀以降、「クラシック」、「厳選された」という用語が中等教育の教科書のタイトルに頻繁に使用されてきた。この事実は、研究代表者がリヨンのフランス教育院で数年来行なってきた調査でも確認できる。また、1990年代半ば以降は、「ある文明が形成される際にその基礎を成す」という意味の「創立的テキスト (textes fondateurs)」という用語が頻繁に使われている。

クラシックと学校教育の関係という視点から見たフランスの特徴は、コーパスがほぼ文学作品のみで形成されてきた、という歴史的事実にある。中等教育の大衆化が進んだ1970年半ば～90年代は、この伝統を見なおす動きがなかったわけではない。しかし、この時期においてさえ、国語教育が文学コーパスを軸に実践されていた。

しかも、近年では初等教育においても学校と古典の関係は強化されている。たしかに、就学前学校、小学校の教科書は、中等教育とは異なり、多様なテキスト(例えば、日本にも見られるような科学的、社会的エッセー)を使用している。しかし、2008年9月から施行されている就学前学校カリキュラム、書き言葉に慣れ親しむ方法として、「文学」、「文学的文章」の重要性を初めて明記した。一方、日本は主にPISA対策のため文学コーパスの重要性を小さくし、情報の整理・編集・発信能力を強化しようとしている。今日のフランスと日本における国語教育の方向性は鮮明な対照をなすのである。

(2) 「古典」から「文学遺産」へ

国語教育における文学が占める重要性の強化とともに、近年のフランスで注目すべき動向は「文学遺産」という概念の導入である。現行カリキュラムでは「文学遺産」という用語が就学前教育から後期中等教育まで一貫して使用されている。また、カリキュラムと並んで教育現場に大きな影響力を及ぼしている共通基礎知識・技能・教養(義務教育修了時に修得すべき知識・技能・教養)にも、「文学遺産」への言及が見られる。

ある社会・文明の基盤、規範となる文学作品群の呼び名を、教育の主体である国家が主導して変えることには、重大な意義があると考えざるをえない。なぜなら、「文学遺産」の導入は、文学テキストと社会の関係の変化したこと、さらには、文学テキストが学校・社会で果すよう国家が期待する役割が大きく変化したことを含意するからである。

(3) 新たな視点の導入の必要性

これまで研究代表者は、近年のフランス国語教育の改革を以下の視点から説明してきた。すなわち、科目独自の知の体系を構築する必

要性(『岐路に立つフランス語教育』、『日仏教育学会年報』,第8号,2002)、中等教育の一貫性よりはむしろ初等教育と前期中等教育の連携を担保する狙い(『母国語の再構築』,同誌,第12号,2006年)、あるいは言語学の知見に精通していない教育現場への配慮(『コミュニケーションから文法と文学史へ』,同誌,第16号,2010年)である。

しかし、「文学遺産」というコンセプトが導入された背景、意義を理解するには新たな視点からカリキュラム、教材、教育実践を再考・分析する必要がある。また、本研究から得られる知見は、文学教育の重要性が低下する日本の教育現場にも貴重な視点を提供しうると考えられる。

2. 研究の目的

本研究では以下3つの問題の解明を目指す。

(1) 「文学遺産」の背景の考察・定義

なぜ、古典や名作という概念にとって代わる形で、文学遺産というコンセプトが導入されたのだろうか。導入の背景で、フランス社会と学校との関係にどのような変容が生じたのか、文学遺産には国境があるのだろうか。また、フランスでは、国語教育の重要性が低下していると言われて久しい。こうした状況下、フランスの教育行政はなぜ就学前教育から後期中等教育までの国語教育を文学中心に再構築したのだろうか。これらの問いに答えることが、本研究の概念上の柱である。

(2) 文学遺産と読書・教育実践

(1)が提起する問いに答えるには、フランスにおける国語教育の現状を把握することが不可欠である。文学遺産継承のため、カリキュラム、教材はいかに組織されているのか? フランスにおける中等教育、初等教育のカリキュラム、教科書、および教員向けの指導書、各種試験問題における文学テキストの扱われ方を精査することを通じ、これらの諸問題に答えたい。特に中等教育におけるフランスの国語教材の記述、分析作業は日本ではほぼ手つかずの状態である。よって、この課題に取り組む意義は大きく、日本の国語教育にも一定の貢献をなすことが予想・期待できる。

(3) 文学遺産と教員の意識

教育改革の実態を記述・分析するには教場の調査が不可欠である。「文学遺産」がカリキュラムの概念上の柱になることによる、教員の教え方・意識の変動、生徒における古典の接し方の変化を調査する。

3. 研究の方法

(1) 文学遺産とは?

文学遺産は就学前教育から後期中等教育まで、フランスの国語教育を支える鍵としてカリキュラムでは一貫して参照されている。文学遺産という概念を可能な限り明確にする必要がある。従来、フランスの歴史の中で重要な役

割を果たした作品群の呼称としては、古典や創立的テキストという用語が使われていた。それが、文学遺産に取って代わられなければならない理由、必要性、背景、この概念の曖昧性について、カリキュラムを精査する。

(2) フランスにおける聞き取り調査の実施
本研究では、フランスで国語教員を養成している研究者との緊密な協力のもとに計画されていることにある。フランス人研究者の協力を得ながら、カリキュラムに導入された文学遺産という概念が、どのような影響を及ぼしているかを教員に聞き取り調査を行う。

(3) カリキュラムの精査
フランスのカリキュラムについては、各学年でどのような作品が文学遺産としてリスト・アップされているのか、作品が書かれた時代、ジャンル、作者の国籍・使用言語等に配慮して調査する。さらに文学教育においては、いかなる教育目標のもと、どのような知識・技能・態度が、児童・生徒に求められているのかを解明する。

(4) 教科書、指導書の収集・分析
ここ数年来、研究代表者はコレージュの国語教科書、教師用指導書を系統的に収集してきた。平成22年度からは小学校、リセの国語教科書の収集にも着手した。収集した資料は既に100点を超えている。20世紀フランスの前期中等教育における国語教育に関する資料については、鹿児島国際大学は国内有数の充実度を誇っている。今後も資料を収集し、コレクションの継続的な充実を図る意義は大きい。

それ以前の資料についても、1940年代以降に出版されたコレージュ国語教科書を中心に、リヨン高等師範学校附属教育図書館で、デジタル映像に収める作業を続けている。

教科書の分析に当たっては、教科書に集録されている作者・作品がどのように紹介・導入されているかを分析することによって、作者・作品の〈遺産化〉に教科書がどのように関わっているかを解明する。

(5) 国際比較・対話に向けて

本研究の特色の1つは、フランスの国語教育の現状に密着すると同時に、国際比較の視点を導入することにある。カリキュラム、教科書のみならず、指導書、各種試験の分析をフランスとの比較という観点から行う。同時に日仏の研究者間で討議・考察を深化させる。

4. 研究成果

フランスの学校教育における文学遺産について幾つかの重要な発見ができた。

(1) 「文学遺産」という概念以前に文学遺産が成立・伝達

中等教育の民主化に大きく貢献した1938年改革から、「統一コレージュ」と呼ばれる改革が施行される1977年までに使用された前期中等教育国語の教科書の内容を調査した。その結果、第2次世界大戦、ナチスドイツによる占領、第2次大戦後の対独立戦争といった、多くの歴史的試練を経たにもかかわらず、この期間の前期中等教育における国語教育は極めて安定していたことが判明した。教材として使われる作家、作品にもほぼ変化が見られない。当時は「文学遺産」という言葉はほとんど知られていなかった。しかし、学校では日々の教育実践を通じまさしく文学遺産の継承が綿々と行われていたことになる。

また、教育方法も教材同様安定していた。1937～38年に施行された指導要領解説は、戦後に起こる前期中等教育の拡大・民主化に対応するため、若干の微調整が適宜施されたものの、1977年の改革まで、廃止されることはなかった。

コーパスも教育方法も安定している上に、生徒も多様化の兆しはあるとはいえ今日の状況からすれば遥かに均質である。そのため教科書の改訂、あるいは新しい教科書の企画の必要がない。多くの出版社は30年代に初版が出た教科書をわずかの改訂を加えながら、60年代まで出版していた。

(2) 抜粋選の存在

1930年代から70年代までの教科書の調査から、編集上の一大特徴を確認できた。それは「17世紀から今日に至る散文もしくは韻文による抜粋選」（いか「抜粋選」）という学習項目の取り扱われ方である。今日では、カリキュラムに登場する学習項目にはほぼ等しく教科書のページ数を割くのが一般的である。

ところが当時の教科書は、「抜粋選」だけが、他の学習項目に比して特段に多くの頁数を割り当てられているのである。教科書の総頁数に占める「抜粋選」の割合は様々だが、25%を下回ることはなかった。多いものでは75%を超える教科書も確認できた。また、学習目標も他の学習項目とは異なっていた。すなわち、他の学習項目では文学的教養の涵養を図られている一方で、「抜粋選」はフランス語の読解力、幅広い知識（文法、綴り字）、作文力の養成を目指していたのである。これは、教科書本文に付された設問からも確認できる。唯一「抜粋選」に付された設問だけが、内容理解以外に言語、口頭発表、話し合い、作文に関する質問・課題を課しているからである。

また、「抜粋選」の中身にも大きな特徴が見られた。「抜粋選」は「17世紀から今日に至る」をカバーしてはいるのだが、実際にはどの教科書でも例外なく19・20世紀のテキストが圧倒的な多数を占めている。また文章のテーマも家族、小動物、異国、冒険など生徒の関心を引きやすいものが多い。これは、「抜

粹選」の狙いが文学的教養よりも言語運用能力の育成に主眼を置いたことの帰結であろう。

(3) 教育現場における文学遺産の必要性

教育現場において「文学遺産」という概念が意識的・本格的に導入され始めたのは、統一コレージュ施行以降のことである。

1977年以降、コレージュは小学校を卒業したすべての子どもたちを受け入れることになった。同時にコレージュは、生徒の多様化に直面する。またこの時期は、移民の家族や第二世代の移民の受け入れ問題が表面化しつつあった時代である。とはいえ、1970年代後半から1990年代にかけての教科書は、教科書全体がいわば「抜粋選」化していた時代でもある。この間、外国文学の導入(1977年カリキュラム)、新聞、漫画、広告、イメージ等の教材化(1985年カリキュラム)や若者向け文学の導入(1996年カリキュラム)が試みられた。これらの施策は新しい生徒にどう対応すべきかの模索であると同時に、現代に相応しい教養の模索でもあったのである。

これらの模索を経た後、「文学遺産」が教科書の構造に決定的に大きな重要性を与えたのは2005年の「共通基礎知識・技能」の制定、2009年のカリキュラム改訂以後のことである。特に2009年からは教科書の構成が大きく変わり、ほぼ古典、名作が教科書を独占する形になっている。こうした動きの根底には、文学的遺産を広く市民が共有することで、フランス・ヨーロッパへの帰属意識、市民意識の養成を図る狙いがある。

(4) 教育現場における文学遺産

しかし、研究代表者が2016年9月にボルドー市内及び同市近郊で行った聞き取り調査によれば、文学遺産導入の意図が現場の教員に十分に伝わっているとは言えないことが確認できた。現場の教員の感覚からすると、ある改革が教育現場に浸透する前に、改革の総括が行われないうまま、次の改革が議論され施行されてしまうからである。事実、フランスでは2016年新学期から新たなカリキュラムが実行されている(しかも、新大統領マクロンは選挙運動中にこのカリキュラムの撤廃を公約に掲げていた)。新カリキュラムでも文学遺産の重要性は謳われているが、フランス文学の基礎とも言える、古代語の学習は時間数が大きく削られた。

以上の事実からも伺えるように、文学遺産を巡る政策の背後には文学的教養の涵養・伝達に対する社会の危機意識が働いていることは強調されるべきであろう。フランス語で文学遺産は« le patrimoine littéraire » と言われている。この« le patrimoine »という用語は相続の対象となるべき財産をさす。相続は意味しない。これは相続された財産をさす« l'héritage »とは大きく異なる点である。フランスで文学遺産が議論される際に、« l'héritage »ではなく« le patrimoine »という

用語がより頻繁に使われる点にも伝達が自明ではないことに対する危機意識、問いかけが働いていると考えられる。

(5) 日仏間の対話

研究期間の最終年に当たる2016年10月と12月にはボルドー大学=アキテーヌ高等教育師範大学院の研究者3名と、研究代表者を含む鹿児島国際大学の研究者4名を交えて、セミナー(日仏公開研究会)を行った。フランス側からは、文学遺産を巡る近年の研究動向(クリスチアンヌ・コナン=ピントード准教授)、文学遺産のデジタル化(アンヌ=レマンズ准教授、研究協力者)、文学遺産とデジタル・リテラシー(ヴァンサン・リケート教授)に関する発表、鹿児島国際大学からは、日仏の教育現場における文学的教養(研究代表者)、現代国語教育における文学作品の変遷(村瀬士朗教授)、歴史的に見た書写教育のねらい(内山仁講師)、現代日本語研究から見た学校文法(松尾弘徳准教授)についての発表が行われた。これらの発表は、鹿児島国際大学の助成を受けて2017年秋に出版予定である。また今年度は2018年の2~3月にボルドーで、国語教育をテーマとした日仏セミナーを開催予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計5件)

飯田伸二, 国民文学から文学遺産へ: 前期中等教育を中心に, 『STELLA』, 九州大学フランス語フランス文学研究会, 査読有, 35号, 2016, 11-24頁

飯田伸二, 2016年のコレージュ改革: 学級と科目の脱構築に向けて, 『国際文化学部論集』, 鹿児島国際大学, 査読無, 第17巻3号, 2016, 367-382頁

飯田伸二, 「抜粋選」とは何か: その歴史的役割をめぐって, 『STELLA』, 九州大学フランス語フランス文学研究会, 査読有, 34号, 2015, 39-55頁

飯田伸二, コレージュにおける芸術史教育, 『国際文化学部論集』, 鹿児島国際大学, 査読無, 第15巻4号, 2015, 367-382頁

飯田伸二, 戦後フランス語教育の変遷: 1940-60年代のコレージュ教科書の事例から, 『STELLA』, 九州大学フランス語フランス文学研究会, 査読有, 33号, 2014, 29-36頁

[学会発表](計2件)

飯田伸二，前期中等教育における文学遺産：日仏の比較を通じて，第2回日仏公開研究会「文学遺産と学校教育」，2016年12月3日，鹿児島国際大学（鹿児島県鹿児島市）

飯田伸二，統一コレージュ施行に至る戦後フランス語教育の変遷：1940～60年代の第6年級教科書の事例から，日仏教育学会，2014年11月29日，大阪大学吹田キャンパス（大阪府吹田市）

〔図書〕（計0件）

〔産業財産権〕

出願状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等：無

6. 研究組織

(1) 研究代表者

飯田 伸二（IIDA, Shinji）
鹿児島国際大学・国際文化学部・教授
研究者番号：60289650

(2) 研究分担者

（ ）

研究者番号：

(3) 連携研究者

（ ）

研究者番号：

(4) 研究協力者

アンヌ・レマンズ（Anne Lehmans）